
鬼の守る山

夏実歓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の守る山

【NZコード】

N3826D

【作者名】

夏実歡

【あらすじ】

地霊小人から聞いたさすらい人に会うために旅をしている謎の少女。彼女はついに尋ね人の閉じ込められている五つ峰の山にたどり着く。彼女はさすらい人に会えるのだろうか?また、彼女はいったい何ものなのか?ファンタジーの昔の話・・・

第一章（前書き）

この物語はミヒヤ・ホール・エントのネバーエンディングストーリー及びそのショアザワールドのレジョン・オブ・ファンタージョンの一次創作です。

苦手な方は大目に見てください。
また原作を読んだ事が無い方は一度読んでみてください。面白いで
すよ。

第一章

これは、ある地靈小人が聞いた話で、今からはるか昔の事だそうだ。囚われになつた古いさすらい人の話である。私は、この世界に入つた人の子の話を知つていたから、さすらい人の話にもとても興味があつた。そいつは、この世界の東方の五つ峰の山に閉じ込められていたという話だが、今もいるのかどうだかわからない。ほかに詳しい話も無い。第一この世界では東とか西とか遠いとか近いとかそんな事はあまり関係がないともいえる。

ただ、一つ確かな事は、私が今旅をしていて、その彼に会いたいという事だけだ。

そのために、ガラスの山からレオン人の住む砂漠を抜けて火の山を越え草海原を行くこと一月、岩喰い男の食べ粕山に入り、暖か湖のある五つ峰の山にたどり着いた。その山の大きい事大きい事、まるで天を突き刺すがごとくに聳え立ち常に山の東か西が夜であり、こゝれの頂きに登るのは足のあるものには無理であつて、羽のある者も登つたが最後、あまりの高さに恐れをなして飛ぶ事ができなくなる、つまり帰れなくなってしまうのだ。

ただ、たまに誰にも邪魔される事の無い眠りを求め、幸いの竜が東から一番目の峰の頂きに降りてくるという話だが、それも、200年に一度くらいである。

そんな調子であるからこの山にはほとんど生き物が住んではいない。この山を越える方法は一つきりで中央の峰とその西側の峰の間（そこに暖か湖があるのだが）の広い谷間を抜けて行くしかない。そこだけは、急な石段で作られた道が続いており三人の山守がこつそり暮らしている。そして今、私がいるのはその広い谷間、湖のほとりの不思議な建物である。中は存外広くちょっと大きな集会所といったところで、その一番奥の壁の真中に大きな札が一枚貼つてあ

つた。まるで刷り込んだようにぴたりと貼つてあってとてもはがれそうに無いそれには、「公主命五山封」と記されており、その横には鉄の豆球がいっぱい入った壺が置かれ、一見何かの祭壇の様にも見えた。

第一章

つこわつきまでは毎間のようだつたのに外はもう暗くなつていた。何故なら日はとうに真上を過ぎていたからだ。この山では昼の時間は普通の半分で夜の時間は変わらず夜なのだ。そして、西つまり日の沈む側から登つた私はお日様と行き違つたのだから、長い夜を過ごさなければならない。それは上り始めて三日目私のにはよくわかつたことだ。だからここで、いつたん夜を過ごそうと決めたのだった。

そうして、日がすっかり落ちる頃には寝る支度も整えて長い夜をいかに過ごそうかと思案していると、かすかな足音とぼそぼそしゃべる声が聞こえてきた。

「いや、久しぶりに三人揃つたね」

「ねえねえねえ、今夜は俺は留守番してたいよ」

「駄目駄目、あいつの餌は重いんだから変わりばんここに運ばなくつちや、とても朝までにはつけないもの」

「そんなこといつて、結局は誰か一人は何もしないで済んでるんだからついてくのは退屈さ」

「三人一緒にやる仕事さー、そういう約束でやつてきたのにおまえはいつもそんなこと言うなあ」

「でもさ、留守番も仕事だと思うよ、俺は」

「僕はそうは思わないな留守番なんて待つてるだけで、仕事だなんていえないよ」

「どちらにしても、私達は三人一緒にこの仕事はやりなさいっていわれてる。だから三人でやるべき仕事それが定めさ」

するとだんだん、ぼそぼそ声は大きくなつて、足音はこそからどたどたに変わってきた。彼らの声は言葉は丁寧だけれどもまるで轟々燃える焰のような声だつた。やがてどたどた足音がドスンドスンに変わりぴたつと止まつた。

「あれあれあれ、誰か調理小屋に上がってるみたいだよ」

「ふんふん、確かに確かに誰かいる」

「珍しいけど、困ったな、これから料理の準備なのにな」

「なんとかいつて、少しの間、外にいてもらえないかな」

「そうだな、少しの間出でもらわないとたぶん火傷をしちゃうだろうから」

「じゃあ、俺が言つてくるよ三人でいつても驚かせちゃうだらうから」

「そうだね、まかせたよ」

「私もまかせた」

そして、言い終わるが早いが、戸口のほうにぬつと大きな毛むくじ

やらの青黒い手が現れて、

「旅の方、旅の方、入りますよ」

と一言いつて入ってきた。私はその姿を見て飛び起きてしまった。

そいつは、青い肌に、まるで針金みたいな毛を生やし、大きな口には狼みたいな歯が並んで目は鬼火のよう、頭には野牛のような一本の角が生えていた。体格はがっちらりしていて平原地方の緋緜野牛くらいはあり、手には大きな大きな石のしゃもじを持っていた。

「なんだ、なんだ、旅の方、起きていらしたんなら返事くらいしてもいいじゃありませんか！まあ、起きていたなら話は早い。少々気の毒ですが、ここはちょっとこれから用事で使うので外に出ててやもらえませんか？」

私があまりの恐ろしさにがたがた震えて声も出ないでいると、その鬼火のような目玉がギョロリと動いてこちらを見る。

「聞こえてないんですか！返事は大切ですよ・・・つづむ、耳が聞こえてないのかな？」

そして大きく息を吸い込むとまるで角笛のような声で

「すゞい／＼ま／＼せ／＼ん／＼！／＼よ／＼う／＼じ／＼で／＼こ／＼こ／＼を／＼つ／＼か／＼う／＼の／＼でえ・・・」

空気が破裂したよくなつた。すつと意識が遠のく一瞬天井が見え

たかと思つと田の前が真っ暗になつた。

突然、私はものすごい熱気に目を覚ました。

「あ、お気づきですか？」

横にはさつきの青い奴がいて、私が小屋の外にいた。どうやら気絶していたらしい私を外に運び出したみたいだった。

「突然倒れるんだから、びっくりしますよ。ねえ、倒れる時は一言いつてくださいな」

そういうながら、一足こちらに近づく。まるで、刺すような熱気がぐわっと押し寄せてくる。驚いて私が後ろに飛びのくと。

「ああ、なるほど、怖がらなくてもいいですよ。別にとつて喰いはしませんから」

幾分落ち着いた表情でそういうとドッカリその場に腰を下ろした。その段になつてようやく私も落ち着いてきた。

「すいませんが、小屋の中には入らないでください」

私の様子を見ながら、その青鬼は穏かに言つた。声は燃え盛る焰のようだつたが、そこから穏やかさが感じられた。

「どうして入れないんです？」

私はおずおずと聞いた。

「ちょっとね、俺達が料理をしたんでね。鬼火族でもない限りえらい事になつてしまふんですよ、熱くてね。ほら、今の俺の体もすぐ熱いから近づくのも辛いでしよう？」

そう言われて、はたとさつきの熱気に気付いた。よく見てみれば鬼は口から煙を噴いて体からは蒸気が立ち上っている。

「だから冷めるまで待つて下さいね。俺は湖で体を冷やしてくるから」

そう言つて、鬼はズシンズシンと湖のほうに向かつていった。

その跡には、真っ赤に足跡が残されていてどれだけ彼が熱かったのかがよくわかった。それから、遠くのほうからジュワ とすごい音

がして蒸氣の柱が立ち上った。

「すごいなあ」

と、私はただなんとなく感心してしまった。暫くすると、また、ズシンズシンと足音を立てながら青鬼が帰ってきた。今度はさつきより幾分軽やかな足取りで機嫌も良さそうな雰囲気だった。

「どうです、旅の方？　だいぶ涼しくなったでしょう」

鬼は言つてぐつとこちらに近づいてきた。近づかれるとその迫力はより一層増し鋭い爪やごつごつした手はその風貌をより恐ろしく見せたが、人懐っこい雰囲気も同時に伝わってきてそれほど怖くも思えなかつた。彼の体もまだ熾きぐらいいの熱は放つていたけれどそれがかえつてやさしい暖かさだつた。

「ええ、だいぶ」

そう私が答えると嬉しそうに、といつても傍から見たら人狼が舌なめずりしたかのようだらうが、微笑んだ。

「実はあんたには、感謝しなけりやならないんですよ、俺は。あんたのおかげでこうして仕事をサボつて留守番できるんですから」「でも・・・・」

私は一つ疑問が湧いた。

「そんなに、熱くなるなんてどんな料理なんですか？」

鬼はちょっと困った顔をして一瞬星空を見上げてから言つた。

「なあに、炒り豆とスープですよ。ただ、鉄の豆と銅のスープなんですね」

なんだか頭がくらくらした。

「そんな料理初めて聞きました！　それ、食べるんですか？　あなた達は」

そう私が聞くと、鬼は一いや一やはしながら言つた。

「食べるとしたらどうするんで？」

「私、驚いちゃいます」

「でも、ファンタージョンには勘違い男だつているし珍しくは無いでしょう」

「やつかもしれないけど、やつぱりはじめて聞く事だから驚きますよ」

「じゃあ、この料理を聞いて驚いたわけだ！」

「はい、だけれど、あなた達がこの料理を食べるのならむしと驚きます」

その答えを聞いて鬼はゲラゲラ笑った。その笑い声はガランガランと大きな鈴を鳴らすように辺りに響き渡った。

私は今度は氣絶しまいと耳を抑え鬼が笑い終わるのを待つたのだが、鬼はそんな私の姿を見てさらに声をあげてガランガランと激しく笑つたのでこちらは堪らなくなり、あらん限りの声で叫んだ

「何がそんなにおかしいんですか？！」

鬼はようやく笑つのをやめて、まだ一ヤ一ヤはしていたが、ふつつとひと息つくと

「いや、驚かせるのはもともと俺達の仕事の一つでしてね、最近はほとんど生き物には会わないし、ここ千年ほどは派遣の身で本業はお休みだったもんどうれしかったんだわ」

「困った仕事ですね」

「いや、本当よそでは事情のわからん奴らには困った事みたいですがね、ここは住み心地がいいんですよ。こちらの親族もありますし。まあ、もつとも、そういうのに会にはいけないんですけどね」

「なんだ、よそでは困った事でこちらではそうではないんですか？」

それに仲間に会えないって言つのはどういふことですか？」

私はいつのまにか鬼との会話が楽しくなってきていた。

「それはですね、一つは・・・さつき言いましたがね、俺達はよそ者でね、大王様から派遣されてきたんです。だからよその事も知っている。それが一つ」

「じゃあもう一つのほうは?」

「そつちは簡単!旅の方は俺の仕事にお気づきでない?」

「いわれてはっと気付く

「あなた達は、話に聞いた山守さんか!」

ガランガランと、けど、私に氣を使つたのか、さつきよつは控えめに笑つて

「やうですとも、俺達や山守です。だから山を離れる訳にはいかんのですあ!」

と、その野牛のようにたくましく体を膨らませた。

「で・・・、食べるんですか?」

私はおずおずと聞く

「何をだい?」

はて、どうした話だつたかしらと鬼は首をかしげた。私はなんとか愉快になつて二口二口しながら聞く

「鉄の豆と銅のスープですよ」

すると鬼は、よつやく思ひ出したのかしきりにうんうんとうなづいている。

「ああ、その事だったら俺達は喰わんですよ。あれはお勤めでね。それに俺達は火が通つてゐるのは喰う事は無いんです。何せ鬼ですからね」

「じゃあ、何でそんなものを作るんですか?」

「いや、それがお勤めで・・・」

彼は、なんとなく口を濁して「こちよ」と言つて出した。どうもまあま

りいつちやあいけない事のようだつた。しかし、そう思つてゐても聞きたくなつた。

「だからどんなお勤めでなんですか？」教えてくださいよ

うへん、うへんと鬼は考え込んでいた。ぶつぶつとなにやら独り言をつぶやいている。

「昔、地靈小人にあいつの事を話したときも怒られなかつたし大丈夫かなあ・・」

私は地靈小人という言葉を聞いてこの山守は私の探し人を知つていいのだと感じた。

これは是非、話を聞かなくては、そう思った。

「別に、誰かに話すわけではないですよ。それにその様子だとはつきり話すなどいわれてる訳ではないんでしきう？」

「うへんでもなあ、本当はなるべく人目につけたまつて言われてるんだ。出会つてしまつたらしじうがないけど。だから、道も一つだけしか作らなかつたのにな」

なんだかもう、聞いていない事までしゃべつてゐる、どうやら押せばしゃべってくれそうな雰囲気だ。

「なんだ、なおの事大丈夫ですよ。私はその事を見たわけではないし聞こうとしてるだけだから。さて、話して下さいな」

「でも、話すといつは望めば会えるつてことかもしれないですよ、ここでは。だつて、ここはファンタージエンだもの。思いはどんな乗り物よりも優るのですから」

なかなか、どうして感の冴えた回答だ。だけれどあきらめる訳にはいかなそうだ。どうやら道なりに進んで会えるわけではなさうだし、彼の言葉からいえば地靈小人からこの話を聞いた時点はどうしても会いたくなつてここまでこれたのは私の思いが強かつたからだ。

「大丈夫、大丈夫、そんな事望むはずがないでしょう。人が困る事を望むのは私の好むところではないですもの」

何ら説得力のない嘘だがとつさにこれしか出なかつた。勢いで「ま

かそうと私は続ける

「あなただけて、ここまで話したんですもの。料理の事まで。きっとあなたも話したかつたんですよ。さあさあ、話して下さいな。大丈夫ですから、大丈夫ですから」

鬼は腕組みして唸り込んだ後、

「いや、やっぱり駄目だ」

といったので、私は最後の手段を使つた。

私はおつかないのを我慢しながら相手の顔を覗き込み、目を見つめながらこういった。

「ねえ、お願いです。私の目を見て、そう、まっすぐ見つめて、今から言うことをよく聞いてくださいね。ちょっと私の事をしゃべります。私、これでもね。高貴な生まれなんですよこの世界ではね。本当ならこの世界は思いのままな位の、でも私はそうじやなかつたのですこれ、実は私の秘密。でも、私にもちょっと特別な力があるて、それはね、目と目を合わせるとあなたを虜にできるんですよ。お話するほうが楽しいから本当は使いたくなかったけどもあなたが強情なのがいけないんです。さあ、話してください」

そうこれが、私の秘密。地霊小人から話を聞いたときにはじめて気付いた。それまでは、名前ばかりの貴族だった私がはじめて手に入れた力だった。

さて、鬼はすっかりぼうつとして語りだした。

「この料理は・・ですね、ご主人。山のふもとのさすらい人の物なんです」

「どうやら当たりのようだ、と私は思った。

「で、何故そんなものをそいつは食べるのかな?」

鬼はふらふらと答える。焰のよつな声もいまやふ抜けせいぜい竈の火だ。

「奴は・・極悪人として・・それ以外は・・食べさせては駄目なんです」

その答えに、私はぞくぞくしていた。半分はそんな刑罰に処される事の恐怖で、半分はさすらい人の話に対する期待で。

「そいつは、何をしたの?」

「知らないです・・ただ、とんでもない奴だとしか・・・古い古い魔物だとしか」

イライラして私は言った。

「役に立たないわねえ！あんたは何なのさ、まつたく！」

鬼は律儀にも悪態にまで答える

「へえ・・俺は地獄の獄卒で・・」

そんな事を聞いたのではない！と言おうとして、ふと疑問に思った。地獄の獄卒族なんて、種族を聞いた事は無かつた。

それに、この国にじや、いろいろな地方があるし地獄みたいな所もあるけど、本当の地獄なんて聞いた事がなかつた。こいつは自分をよそ者だといつていたが、どうやら本当に、こいつもこちらのものではないようだ。

どういうことだろう？よそ者がよそ者を人の国で管理しているなんて・・・思つたよりもずっと楽しくなつてきた。私の願いがかなうかもしれない、心の中でほくそえむ。

やはり、どうしてもさすらい人に会つてみなくては

「そいつは何処にいるの？」

「麓です・・・道から外れてちょっとといったところです」

「そいつには会えないの？」

別に聞く必要もなかつたが、とりあえず聞いてみる。

「はい、危ない奴でして会わせられないんです」

閉じ込められていても危ないのか？でも、私にはこの目があるしこいつも今や私の手足だもの、大丈夫、大丈夫、そう自分に言い聞かせた。

さあ、これからさすらい人のところに案内させようと思ったその時、私はふと、他に一人の山守がいたことを思い出した。今から行つたらきっと途中ではち会うだろう。それはいくらなんでもまずい。何をしようとしているかがばれたらひどい目に会うだろう。私には今はこの目と青鬼しかいないのだ。

暴力沙汰になつたらきっとやられる。そうしたら、なにせ、鉄の炒り豆と銅のスープを罪人にご馳走してくる奴らだから、ただではすまなそうだ。幸い彼らは、普段は分かれて仕事をしてゐるようだし今夜は当初の予定通りここで一晩過ごすとしよう。そう決めてからはやる事は少なかつた。私は青鬼に、仲間が来たらいつも通り接して、怪しまれないようにして、一人と別れた後にこつそり迎えに来るようについて、一人の帰りを寝たふりをして待つた。

「えつほ、えつほ、えつほ」

暫くすると、威勢のいい掛け声とズッタンズッタンという足音のリズムが聞こえてきた。

「やあ、お帰り二人とも」

青鬼が答えたそのさきを薄目を開けてみて見るとやつぱり、野牛ほどもある石炭みたいな黒鬼ともう一回り大きな燃え盛るよつた赤鬼が体から煙を出しながら大甕を担いで駆け上ってきた。

「いやいや、熱い。いや、重い」

「君がこなくてやはりちょっと大変だったよ」

一人は言葉の割には息も切らしておらず、にわかには信じられないような体力の持ち主である事は明白だった。

なにより、この峠を夜の間に往復してくるのだ。いくら夜が長くとも信じられない速さだった。もしうつかり鉢合戦になっていたら、そう思うと恐ろしさに思わず体が縮こまつた。

「旅の方はどうしたね」

ギョロリと赤鬼の燃えるような瞳がこちらを見た。思わず目をかたむけざす。あまりの恐ろしさに身動きできない。その雰囲気は青鬼や黒鬼とは一味違っていた。青鬼が脅かさないよう一人で私のところに来たという意味がわかるような気がした。三人どころか、赤鬼が入ってきていたら私はショックで死んでいたかもしれない。まさに、地獄の獄卒の名にふさわしい迫力だった。

「旅の方は目を覚まさなかつたのかい？」

黒鬼が続ける、まだ赤鬼の視線は私の上にあるのがわかる。

「いや、一度目を覚ましたよ。その後で寝なおしたのさ。昼間はずっと歩き通しだった見たいでね。小屋の中は寝れないといったらあそこでいいというんだ。よほど疲れてたんだろ？」「

やつと、赤鬼の視線が消えて

「なるほど、見ればまだ子供のようだ疲れるのも無理はないな」「氣の毒だが小屋は使えないからな。なんたって地獄の火を使つた後だ、たとえ、今晚中冷ましたつてまだサウナのほうがましまつてもんだ」「

といつて、黒鬼が笑おうとする

「おいおい、どうやらあのおちびさんには私達の声は大きすぎるのを忘れたのか」「赤鬼がとめた。

「さあさあ、二人ともまだ体から煙が出るほど熱いみたいじゃないか。早く、湖に行つて冷ましてきなよ」

と、青鬼が二人を追い払う。一人が遠くに行つたのを確認して、私は体を起こした。青鬼はすっと傍によつて来て私の話を聞こうとし

ている。

「いいこと、予定通りやるのよ。私は本当に疲れたしもう寝るわ。
ただ、一つ付け加えておく事があるわ、何かあつた時にはすぐに私
を守るのだよ」

忠実な下僕となつたこの鬼はしつかりうなづいた。

やがて、遠くの地平に朝日が射す頃私は目を覚ました。どうやら、青鬼はうまくやつてくれたようであった。私があたりをきょろきょろ見回していると青鬼はまるで屏風のような崖の上からすごい勢いで駆け下ってきた。

私が手を振つて答える間もなく、一目散にこちらに駆け寄つてくる。その様子を見て、改めて自分の目の力を実感し嬉しくなつた。しかし、感激に浸るのもつかの間。いつ、他の鬼に見つかるとも限らない。今は時間が惜しいのだ。羽織つていたマントに包まると、鬼の背中に乗り命じた。

「さあ、あのさすらい人に私を会わせなさい」

鬼はまるで疾風のごとく、山道を走り、景色は飛びように変わっていく。高山の不思議なお花畠を走り抜け、灌木さえもなかつた風景はいつのまにか藪藪しくなり、太陽がその姿を東の空いっぱいに見せる頃には福野の大樹海に入っていた。

妖しげな植物が生い茂るそこには何故か動物の気配は無く、昨日鬼達が通つたであろう真つ黒にこげた足跡がずっと続いていた。突然、鬼が横に飛ぶ。道を外れ、谷を越え、崖沿いにひた走りちょうど五つの峰の真中のひときわ高いその麓でぴたりと止まった。

しかし、そこはどう見てもただの崖で、何かが閉じ込められていそうな牢屋はおろか洞穴も鎖さえ見当たらなかつた。

「どういう事、何も無いじゃない！ 誰も見当たらぬ！」

イライラして、青鬼に怒鳴り散らすと横から笑い声が聞こえる。

「はつはつはつはっ！ 鬼が人を連れてきやがった。俺もやつとこから出られるかもな」

軽やかな声が辺りに響く、私は慌ててあたりを見回すが影も形もない

「ここだ、こっちだ何処に田玉つけてやがる。キキッこっちだ」

ようやく声のする所を見つけるとちょびつとこげた草むらがしゃべ

つていた。

「あなた・・・あなたが私の探していた人？」

「知るか！そつちこそ俺の待つてた奴ならいいんだがな」

「あなた、そんな草まみれでグリ・ンマンなの？」

「違う、ふざけてるのか！俺がそんなもんに見えるか！？」 だいたい、おまえは俺が閉じ込められてると勘違いしてたようだが、そんなまつちょろいもんじゃない。俺は封じ込められてるのさ。おまえが見ているのは顎から上だけだ。草まみれなのは、自分じゃ草もむしれないし、鬼どもは飯を持ってくるだけで手入れするほど気が回らないからだ！」

「あなた、さすらい人なの？」

草むらは答えた

「そうだな、幾つもの世界をまたにかけて暴れまわったんだ。そういうこつたな」

ぶつきらぼうな態度にむつとしながら、鬼の背中から飛び降りた。そして鬼に見張りを言いつけて草むらに近づいた。

「なんだ、なんだ、閻魔のとこの小間使いがこき使われてると思つたら、こんな小娘のいうこと聞いたつてのかー・真面目なだけがとりえの奴がなあ」

私は力チンときてつかつかと草むらに向かうと中でも一番大きな草を乱暴につかむと根こそぎ引き抜いてやつた。

すると下から真っ赤な目玉に金のぎょろついた瞳が出てきた。まったく堪えてない様子でますます腹が立つた。

かきむしるように全部引っこ抜いてやると相手の全貌、といつても顔だけだが、が見えた。短く生え揃つた毛並み、真っ赤な顔。どう見ても猿にしか見えない。私はこんな奴に会うために来たのかと思うとなんとも情けない気分になつた。それは、どうも相手も同じらしい。

「おまえ、どう見ても人の子じゃねえな。くそつたれ」

「私のほうこそ、もつとすごいのを期待していたのに例えば人狼と

か・・・・・今、あなた人の子って言つた！？

「おう、そうだ。俺をここから出せるのは人の子しかいないからな！」

おまえなんかに用はないどばかり、はき捨てるように猿はいつた。
「何で人の子じゃないと駄目なの？ 見たところあなたは埋まつて
るだけでしょう。そんなに出たいのなら、私の下僕に掘らせるわよ」

ただし、すっかり虜にしてからね。と心中で笑う。

「なんだ、素人か、おまえ。俺はこの山に封じこめられてるんだ。
いくら掘つたって俺の体にはたどり着かないし、この山と離れる事
は無い。もしそんな事なら俺はとっくに山を投げ飛ばしてここから
おさらばさ・・・それに、いくらおまえの田がすげても俺にはそ
んなの通じはしない」

思わず後ろに後ずさりする。猿はニヤニヤこちらを眺めている。
嫌な笑顔だ。こんな状態なのにちつともそんな事は気にかかっていない。
私が何なのかなんてぜんぜん気にしてないくせに。からかい
半分でこちらにちょっかい出そうとしているのがわかる。そのくせ
嘘なんかつく氣もこれっぽっちも無いみたいである。さつき言った
ことも本当のようだ。さつきからしきりに私の田を見てくるし、私
もずっと見つめているのに何の変化も無い。

このお猿さんは、一体何だつて言うのか。確かに鬼達が他の生き物
にこいつを会わせないようにしてていたのも解るうとう不気味さで、
それは、ファンタージョン中のどんな夜の生き物よりも不気味で、
まるで幸運の竜のように堂々としていた。

「どうしたね？ 小娘。怖くなつたのか」

猿は歯をむき出してしわくちゃの顔をさらにクシャクシャにして、一層ものすごい笑みを浮かべてこちらを見ている。ふいに、キツと鋭い視線でこちらにらみつけた。

すると、私の髪留めがはじけ、結いあげた髪がぱつりと垂れる。私はぞっとしてその場にしゃがみ込んでしまった。

猿はそんな私をよそに顔にかかつた土を鼻息で吹き飛ばし今度は一転へらへらとした表情である。眉間のしわはだらしなく緩みその金色の瞳だけが炯々と油断無くあたりを見回していた。

「まあ、いいか。ここ一千年じゃ話のわからん鬼以外の生き物は初めてここに来る。どうやつたか知らんがたいしたもんだ。さすがにこんな生活もうなぎりしてたところだ。さあ、何か話せ。そのために来たんだろう？」

猿はいつたが、私はそんな気分ではなかつた。これは化け物、そう化け物！！ まさにユグラムールと同じくらい恐ろしい怪物だわ。こんな化け物とは一刻も早く別れたかったが、すっかり体から力が抜けた逃げる事さえかなわなかつた。

「わ、私は、あなたに興味があつただけ。どうしてこんな所に留まつているのか？ とか、どんな奴か？ とか」

震える声でそれだけ絞りだすと、もう声はでなかつた。

「なんだ、自分のために来たのか。まあ、大抵は人に会つてのはそういうことだらうな。特に呼ばれたわけじゃなければ一方的なものかもしれません。俺が聞きたかったのはもっと楽しい話なんだがな・」

「つまらなそうに、言つて続けた

「しかし、なにせ、旅の方は緊張してるようだし、まずは俺の話を聞いてやろう。俺はおまえの言つとおりをすらりの人だよ。自由なも

のだったさ。俺には父も母も無い天地の気を受けて世界と一緒に生まれたのさ！その後、暫くは生まれたところで、さすらい人でも生れ落ちる場所はいるからな、王様暮らしをしていたがそれに飽きてな、あちこちでかけてみる事にしたんだ。そう！ ちょうど、今のおまえみたいなもんさ。俺はたくさんの事を学んだ。それからだな、自分のすんぐるところ以外の世界があることに気付いたのは、俺が学んだ事を使って、あちこちで、珍しいものを手に入れ好き放題しだした頃さ！」

猿はさも愉快そうに言つ。

「でも、やはり、独り善がりでは段々つまらなくなってきた。俺は、肩書きがほしくてな、天界の役所に勤めてる事にしたんだ。まあ、つまらない仕事だったんだがな。」

目をくりくり回しながら早口でしゃべる猿はとても楽しそうな様子だった。

「何をしていたと思う？、わかるか？この俺にふさわしくない仕事だつた！ 答えてみろよ」

さあさあ、と迫る。どうやら本当に退屈していたらしく、しゃべり始めて楽しくて堪らないようだ。私も段々と望みがかなつた事を思い出して嬉しくなつてきていた。

「何、何をしていたの？」

「いいから、答えてみろよ！ 正解はその後だ」

「うーん、あなたお猿さんみたいで身軽そだから・・庭師かしら？」

「

「はずれだな、大体なんで身軽だと庭師なんだ？近い事もしたことがあるが最初は違う」

「じゃあ、何？」

ちょっと恥ずかしそうに猿はいった。

「馬小屋の番人さ。誰にも言つんじゃないぞ！その後は桃園の管理人だ。でもさ、木つ端役人だろそれ、仮にも元帝王のやる仕事ではないぞ。頭に来たから桃を盗んでやめてやつた。」

「

「それで、それでどうなったの？」

「それで、怒った政府の奴らと戦争を…幸い俺はそつちのまづは自信があつてな散々追い払つて逆に“天に斎しい大聖人”って称号をもらつた。だつてそつだろ？俺は天地から直接生まれたようなものだもの。それで元王様だ。これくらいの役職じやなきやつりあわない

私はうんうんとしきりにつなぎしてしまつた。自分だつて己に相応しい物は欲しいもの。ほんとに欲しいのは名前じゃなくて別のものだけだ。

「その後、暫くは戦争の繰り返しや。そしてある日、俺はついに捕まつちまつた」

「で、ここにいるの？」

「いや、その時は平氣だつた。何せ俺を捕まえておくことも殺す事も連中にはできないんだから、また、お宝を失敬して逃げ出してきたのさ」

すっかり話を聞く事に夢中になつていた私を見て、猿の語りも熱がはいつてくる。

「じゃあ、何でここにいるの？」

「それが、本題だ。俺はさまよう者だからな、人界、天界、地獄ときてここ幻界の話を聞いた。行つてみたくなるさ。ついでにちょっとと暴れてやろうと思つたんだ。そこには不思議な道具がたくさんあって、中でも彷徨山、卵殻堂の文筆老爺の絆絹経と螺旋宮象牙塔の主でこの国を治める金睛公主の交蛇願来輪の一ひとつはどんな願いもかなえるらしいって話を聞いたのさ。それでこの世界に飛び込んだんだがそれがいけなかつた」

耳慣れない言葉に私は思わず聞き返した。

「幻界つて、その物言いだとこのファンタージェンの事でしょう？」

「私この世界のものだけど、ブンピツロウヤもキンセイコウシユも聞いた事なんか無いけど？」

「俺に聞いてもしらん。来てすぐに捕まつちまつたんだから。ただ、

こここの言葉ではないのかも知れんな。俺が聞いたのは外つ國そとくにでの話でな、そこでは地域くにによって言葉が違うのだから ただ、この国の者なら誰もが知つてゐる老人と少女だそうだが？』

そこまで言われてはつと氣付いた、なるほどあの二人の事が外つ国にも伝わっていたのか、

おまけに少し話が変わつてるようだ。

「なあ、心当たりがあるかい？ その二人が何処にいるか？」とかさ
猿が何食わぬ顔で聞いてくる。こいつはその宝をあきらめる気なん
か全然ないようだ。けれども、それを手に入れるどころか「一人に会
う事も難しいだろう。

なにせ、この私でさえも未だその二人には会えていないのだ。え
らばれた、人の子で無い限りは思いどうりには行かないだろ。

だが、それを手に入れるのは恐らく無理だろうと言う事は黙つて
おいた。何でもできますって顔した奴にあんたにも出来ないことが
あるって言つてやる事は別に面白くも何とも無い。自分でそのこと
に気づいて苦しむのがいいのだ。

「でも、あなた、ここから動けないんでしょう？」

そんな事聞いても意味ないじゃない、といわんばかりに顔にかかる
前髪を払いのけながら私は言った。

すると猿は苦々しく

「人の子が来て山の何処かにある札さえ剥がしてくれれば、俺は今
すぐにもこの山を投げ飛ばせるんだ。その前にいろいろ知つてお
いても悪くはあるまい」

「それで、私の事、人の子かどうか聞いたのか。でも、なんで人の
子なの？」

「詳しい事は知らないが、俺をここに閉じ込めた奴が言つていたの
さ。何か特別なんだろここでは？」

「まあそうね、彼らは特別よ。憎い位にね。あなたの言つてた宝物
の片方、願い事を何でも叶える一匹の蛇の御印、こっちではアウリ
ンつていうけれど、それを使えるのも人の子だもの」

でも同時に哀れだわ。末路は大抵決まっているもの。あれが宝？
あんな物自分で使うなんてよっぽどの馬鹿！ 確かに不思議な力は
あるし、持つていれば叶わないことは無い。

だけれども、それは自分で努力するから得られる結果には優りはない。

「そうあれは、罠だわーこの世界という生き物がつけた花のようなものよ。

「あなた、そんなに宝物が欲しいの？ 何か願い事があるの？」
なんだか腹が立ってきてしまうがないが、この猿ならきっとくだらない答えは言わないだろうと期待して聞いた。

「あるさ！」

私は冷めた視線を送ったが猿はかまわず話しつづける
「まずは、ここから出たいって事だなーー」

おどけるよつに言った

「それじゃ、今、手に入れなければ意味ないじゃない！ 馬鹿にしてるのあなた？」

あきれて私は言つ。ふつと猿の雰囲気が変わり、鋭い声で言い放つた。

「馬鹿にしているだとー。馬鹿にしているのはお前のほうだ！！
俺がそんなものに頼るとでも思つてているのか？ ただ珍しいものが
あるから手に入れるまでーー」己の願いなど自分で叶えるものだ。
今までそうして手に入らないものは無かつたーその俺がそんなもの
に頼るといつのかー？」

威厳に満ちた態度で猿は語つた。その姿は首からしたが地面に埋まつてはいたが素晴らしい堂々としてこれを笑えるものはいないので

はないかといつ態度だった。私はこれがこの猿の本性である氣がし

た。こいつのになりたいと本気で感じてしまつた。

そうだ、私には私のやり方と野望がある。なんと言われようと望みをかなえるのだ。旅に出て心底良かつたと思つた瞬間だつた。決心がついた。猿はまだ怒氣をはらみ、その剣幕はまたも私を圧倒していたが、今度のそれは同じ恐れではなかつた。

「次に同じような事を言つたら、貴様の首は無いと思え」

それくらい訳は無いぞ、と金の瞳がこちらを睨み付けている。私は

慌てて謝った。

「ごめんなさい・・・失礼な事を言つて。私なんて言つていいのか・・・」

その時だ、見張りについていた鬼が大きな声を出した。

「ご主人、見つかりました。黒鬼です。どうしましょう！？」

私には、見えなかつたが、こいつの目は信じていいだろ何せこいつは山守だ。山の異変を見つけるのが仕事なのだ。

「どうしましょう！ 黒鬼はこっちに来るの？ 赤鬼はいるの？」

事態は逼迫していた。これで鬼一対に襲われたら逃げ様が無い。早く逃げなければ。気があせればあせるほどに何をしていいかわからなくなる。さつき自分で生きていこうと思つたところなのに・・・

「赤鬼は見当たりません・・・黒鬼だけです。こっちに向かつています」

そういう終えたときにはもう黒鬼の立てる地響きがすぐ近くに聞こえていた。

「足止めして！ 早く！！」

言つが早いか青鬼は手近な木を引っこ抜き、音のするぼづくと飛び込んでいった。めきめきと木の折れる音がして壮絶な咆哮がこだます。

あたりは騒然となつた。谷間の森の狭間に時折恐ろしげな角が覗く。

「おい、小娘。もう行くのか？」

猿が残念そうに尋ねた。

「ええ、もう行かないといけないみたい。この騒ぎじゃ赤鬼も来るかも知れないし、あいつが、かつとも限らないもの」

こちらも残念な気持ちだった。

「じゃあ、最後に頼みがある」

「何？」

「何か食べ物と飲み物をくれ。金氣の味がしないのを

それもそうかと思った。まだ旅の食料はあとは杏の干したのが四つ、水も湖で汲んだものがたくさんとはいえないが一口くらい余分はある。それなら「この猿に少しごらりいやつても撥は当たらないよ」と思えた。

「いいわよ、水と干し杏しかないけれど」

「それでいいよ。こんな状態だ、すまないが食べさせてくれないか」

私は恐る恐る猿に近づいた。

「さあ、まずは杏をもらおうか」

口をあんぐりあけて待つてここに入れると催促する。とりあえず、一つ入れてみた。すると、猿はバリバリと音を立て種^じと食つてしまつた。そしてまた口を開きこうといった。

「もつとだ」

ここで「ねられるとほんとに逃げ送れる。仕方ないのでもう一つ放り込むとまたバリバリ^ご君とあつという間に飲み込んだ。

「まだくれ」

さすがに、半分やつてしまつのは惜しい気がした。次の町までは小人の話では三日近くかかる、引き返すにはこの山は危険だった。これでも、無理はしてる。

「もう、あげられないわ。私はこれからも旅があるの」とこうと、意外におとなしく

「そうか、ならいい。じゃあ、今度は水をくれ」

そしてまた口を開けた。その口に水を流し込んでやる。水は砂に吸い込まれるようにのどの奥に消えていった。

「ああ、うまい」

感慨深げに猿はいった。

「さあ、もう行くわよ。ほんとに急がないと」

ドス^ドンとすごい音がして、ギヤ^{ギヤ}という叫び声が響く。森の影から黒い頭が覗いた。あれは黒鬼だ。ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「待つた、三本だ。行く前に三本俺の毛を抜け。そして、俺の前に見せろ」

「一体何？ ほんとこもつ時間が無いの」

「言ひから早くしろ」

猿のえらい剣幕におされて、サルの顎の毛に手をかけるとえいと引つこ抜きそれを顔のまん前に突き出してやつた。すると猿はふつと強く息を吹きかけた。見る見る三本の毛は三匹の小猿に変わつていく。

「餓別だ。連れて行け。たぶん少しづらいしか持たないが俺の分身みたいなものだ。今はこれが精一杯でな。三匹なのはこ馳走になつたお礼だから三口分だ。水の分だけは特別製だから大事にしろ。後は使い捨ててかまわん」

三匹の猿は私のマントを駆け上り肩にしがみついた。

「ありがとう。こんな、プレゼントを」

「なに礼には及ばん。暇もつぶせた。まともなものも喰えた。それより、おまえはここからどうやって帰るのだ？」

私はやつと氣が付いた。来た時は青鬼の背中に乗つて来たから良かつたが、一人で山道まで出るのはとても無理だ。眼前にはきつく傾斜した薄暗い樹海が裾野まで広がり後ろは断崖絶壁が立ちはだかる。まだ遠くに見えていた黒い影がみるみる大きくなつて迫るのが見える。とにかくここにいたら危ない。来た道からは鬼が来る。

もうお日様もだいぶ高くなつてしまつた。私は意を決して樹海に入ることにした。とりあえず身を隠せて山と反対のほうに行くにはもうそこしかない。

「さよなら！」

一声かけると、暗い森の中へと駆け出した。

ともかく、夜になる前になるべく山から遠ざからなことだけない。木の枝の間をかけながら考える。後ろからは木々のゆさゆさと揺れる音が聞こえる。まだ、まだ距離はある。早く遠くに行かなくては。

しかし、そこは道なんて物の無い世界だ。一箇所も平らなところはなく、じつした岩や根っこもほとんどがこけに覆われていてほとんどのがわからない。ただ大木の間に起伏が続く。何度も何度も落とし穴のような窪みに足をとられながら進む。

「どこだ！どこだ！」

空気がびりびり震えて、木の葉がバサバサ鳴る。私は驚いて足を踏み誤つて小さな小屋ほどはあろうかという根っこから転がり落ちた。幸い地面はふかふかのこけで覆われていたので目が回つただけで済んだ。

立ち上がり再び走り出そうとしたその時、

「そこか、今隠れたな！逃げるなよ、見つけてやる！」

と後ろのほうから声がする。私はとっさに根っこに身を寄せた。あたりは、似たような木がたくさんある。息を潜めてやり過ごう。ぎゅっとマントを握り締めて震える体を抑えていると、「確かこの木なあたりだ。」

すぐ後ろの木で轟々と声が聞こえる。

「この根っこか？・・・はずれだ」

「隣か！？ここにもいない。もうひとつ隣かな？」

「・・・このもいない。向こうの木はだな」

鬼が歩くたびに地面が揺れる

「そこか！」

体がびくっと縮まる。

「いや、いない

すぐ裏側の根つこだ。次はいよいよ私の根つこだ

「じこかあ！」

鬼の毛むくじゃらな手がぬつと突き出されたその時、私の肩から一匹の猿がトンボを切つて飛び降りた。みるみるうちにその姿は私そつくりの長い黒髪のマントをつけた女の子に変わり、鬼の手めがけて駆け上った。鬼は慌てて手をばたばたさせながら贋者は私を捕まえようと追いかける。

「また、またえ。このすばしつこい奴だ！！　捕まえて頭からかじつてやる！」

ひらりひらりとマントをなびかせてましらの如く、まあもともとが猿なのだからそのままだが、鬼をかわす贋者は鬼の鼻の頭を蹴つ飛びました。

「ぐわ、じの小娘め！」

鬼は湯気を立てて怒つてすっかり他の事が目に入つていよいよだ。贋者は今度は鬼の脛を蹴飛ばすと、馬鹿にするような流し目で山を目指してかけていった。鬼は怒り心頭、目をらんらんと光らせて鼻を抑えながら後を追いかけていった。

「までえ～、こんちくしょう！……待ちやがれえ……」
すごい罵倒と足音を残し鬼はあつといつ間に遠ざかつていった。すつかり音が聞こえなくなつてから根つこの間から這い出すると、水を一口、口に含み息を整えた。

「何とか助かつたみたいね」

空を見上げると太陽はもう山の頂きに手をかけかけていた。猿が服を引っ張りしきりに、ある方向を指す。

「じつちに何かあるの？」

「キキ、キキキ！」

どうもそつちに行けと言つ事らしい。どうひらひら、長居はできない。

さつきの事もあるし、ただ闇雲に山の反対に走るより猿の言つ事を聞いたほうがいいかもしない。

さあ、先を急ぐつ。日が暮れる前に。いや、それはもう無理だろう。しかし、早くここを抜けなくては。重い足にハッパをかけて再び走り出した。

そして、その途中途中で猿が示すほうに向かい走りつけた。やがて、山の陰が伸び始め夜の足音が聞こえる頃には、足は痛み、何度も転んだせいで髪は苔まみれ、顔は所々濃い緑や茶色のしみがつき服もどろどろだった。

猿は相変わらず私の肩でキイキイ鳴いている。その方向にもう一足出したとき、ずっと走りずくめで来てふらふらの私の前が突然開けた。どうせりと倒れこむ私の前には一つの道が広がっていた。

「み、みち？・・・

横で猿がわめいている。

行かなくちゃ・・・だけど体が動かない。ふつと意識が遠のいていった

「お~い、お~い、大丈夫ですか？ 旅の方？」

目を覚ますとそこには赤鬼がいた。心臓が跳ね上がった。

「きやああ！」

思わず悲鳴が口を突いた。

「ん？ なんか、ありましたか？」

心配しているようにこちらを見ている。どうも様子が違う。私が何をしたのかまだ知らないようだ。

「それより、どうかしたんですか？ そんな格好で。ボロボロじゃないですか」

周りを見回す。小猿どもがいない。よかつた、きっと見つかったら、危うく殺されていたかもしない。だって、あいつらは小柄だけども顔があの猿そっくりだもの。

しかし、さてどう説明したものか心配そうにこちらを見つめる鬼の顔ちらちら見ながら考える。この状態なら私の目も使えるだろうけど、この赤鬼は、黒鬼青鬼とは一味違うようだ。体も一回り大き

いし中々隙も見当たらない。

もしかしたら、田の事をわかっているみたいな感じだ。そうでないにしても、あの夜も、私のことを警戒していたみたいだし。じいは無力を装つたほうが安全かもしねり。

「はい、実は私が山を降りる時に青鬼さんが途中まで送つてくれたんですけど、その道でばつたり黒鬼さんと会つて、仕事の話で納得行かないとか何とか・・それで一人が喧嘩をはじめてしまつたんです。二人は取つ組み合いながら森に入つていつて夢中でしがみついてたけれどその途中で私は青鬼さんの背から投げ出されて命からがら森の中を走つてきたんです」

弱々しくうつむきながら言つて、鬼はじりつと私をにらんで声をかたくしながら言つた。

「本当ですか？　あいつらがそんな事をするとは思えないんですが

」

やはり、私を胡散臭く思つているようだ

「本当です。それでもなければ、ほらこんなに苦まみれにはならないでしょ？　ここは道は石畳で苦なんか生えてないですもの！」

私は泣きながら訴えてさらに続けた

「早く止めに行かなと！　まだ喧嘩をしてるかもしれないし、もし終わつてはいるとして怪我の手当でも必要です。幸い私は走りつかれただけですから早くさがしてあげてください。さあ、早く早く」ともかく、もうこれ以上鬼のそばにいるのは嫌だつたので早く何処かにいってほしかつた。出発したとして、ついてこられたら猿達を呼び戻せもない。あまり、弱々しくても心配して残るかもしれないし、元気すぎても怪しまれるので横になつたまま何とか起きてるような感じでいつも。

鬼は暫く考えた後すっくと立ち上がり。

「そういうことなら確かめて来なくては、ここで待つてます

よ」

とこつて風のように走り去つた。誰が待つているものかと内心毒づ

も、姿が完全に見えなくなつたのを確認して立ち上がる。すると、

一匹の小猿が駆け寄ってきた。

「さあ、お前達。行くとしようか」

今度は、奴らは山に向かったのだしそんなにあせる必要も無いだろう。走らずとも大丈夫だろう。道もほつきりわかつていて。安心して歩き出した。

あたりはすっかり真つ暗で足元はあまり見えないが、東の空にちよこつと月の端が見えている。もう暫くすれば、月影があたりを照らしてくれるだろう。水を一口含みながらとぼとぼと道を進む。歩きながらすっかり汚れた服や髪に改めて気がつき次の町についたらどこかお湯を使える所があるだろうか?などとのんきな事を考えながら先に進む。

なんとなくひとりじめちついた気分だ。むろん、油断はできないだろうが穩かな明かりと静けさがゆつたりとした空気を作っている。今こうしている限りではこの山もただ馬鹿みたいに高いだけのようにも思えてくる。小猿たちもなんだか楽しそうだ。やがて、月が山の頂きにかかる頃、歩きつかれたので少し腰をおろした。

「キキ！」

突然、猿が騒ぎ出した。静かに辺りに集中してみると山のほうから轟々と空気の震えるのがわかる。まさか！！

「待て！小娘よくも騙してくれたな！！」

たしかに鬼の声が聞こえた。急いで逃げなければ！　私はすぐに立ち上がりまた走り出すのだった。

「こんな事なら、もつと早く抜けられるように考えたのに……」

後悔していた、自分が甘かつたと。声はみるみる近づいてくる。

失敗した。それも二つだ。よく考えれば、あそこで鬼が合流するよう仕向けたのも失敗だった。一人は手に金棒を振り回しながら迫ってきた。

「まで！　娘～までえ！！」

「今すぐ、その頭を叩き割つてやるぞー！」

足音が響き、金棒のブーンブーンという、うねりが聞こえる。

「嘘つきめ！　その舌引っこ抜いてくれるわー！」

ガシャーンとすぐ後ろに金棒がたきつけられた。石畳の階段が砕け破片が飛び散り、石飛礫が襲い掛かる。それでも走る。走りながら私は肩の猿に言う。

「お願いなんとかして！！」

キーと一声鳴いて返事をすると一匹が肩から飛び降りる。その猿が地面に降りるや否や体をぶるつと震わせ大きな川になつて鬼との間を切り離した。

「なんだこんなもの！」

黒鬼が飛び込んだが激流に飲まれ流されてしまった。

すると赤鬼は、川に口をつけて「ぐぐくと飲みだした。その間に私は逃げに逃げた。まだいぶ走って、後ろを向くとまだ川の流れが見える。まだ走った。

そして、また振り向くと、今度はもう川は見えず水の音も聞こえない。変わりに鬼の声が聞こえた。

「まدد〜！逃げるな！！」

またどんどん距離は詰まってゆく。すごいスピードだ。生きた心地もしない。鬼のものすごい叫び声が辺りに響いている。走つて走つて走つて逃げた。もう月は見えず、あたりは真の闇が支配していた。真つ暗いなか怒れる塊が後ろから迫つてくる。熱気が伝わってくる。くだりの石段は想像以上に走りにくく、蹴躓きそうになりながら転がるよう下つていく。

ああ、どしよう、どんどん追いつかれている。声はどんどん大きくなる。足音は荒々しく近づいてくる。ダン！ 土地を蹴る音が聞こえ、一本の大きな腕が左右から私を捕まえようとしたその時！ 不意に石段が終わり私は前方にもんどうりうつて転げた。さつきまで私がいた辺りには燃えるように赤い一本の腕ががっちりと組み合わされていた。

だがそれ以上、鬼は追つては来なかつた。ついに山を抜けたのだ！ なんという感動だらう！！生きている実感が嬉しい。同時に滝のような汗が流れ落ち体がへなへなと崩れ落ちていく。

「はははは」

笑いが止まらなかつた。

その時、ピコ と甲高い音がして私の体が宙に浮いた。同時にドカンとすさまじい音がしてものすごい爆発が起つた。

もう駄目だ・・・

今度こそ死んだそう思つた。

その時だつた。

「うん、まあ合格だな。これからおまえにはいろいろ教えてやる」
横で声がする。ぐんぐん地面が遠ざかり、さっきいた場所に金棒が突き刺さっているのが見える。山の境界線には赤鬼が悔しそうに地

団太踏んでいる姿がある。

「あなたが、水の分ね？」

「そう特別製だぜ！」

私は今、雲に乗っているようだった。やがて、五つ峰の山の向こうに沈んだはずの月が見えてきた。

「いろいろってあんた達が使った不思議な術も？」

「ああ、それもだ！ ところでおまえの名前は？」

「私はサイーテ この世界の始まりと共に生まれたものよ」

その頃、囚われの猿は

「あいつはうまくやつたかな？ これであいつがこの世界に人の子を呼べるような騒ぎを起こしてくれれば思いどおりなんだがまあ、今は眠るとするか」

ひつそりと眠りにつくのであった。

これは昔々の話、幼心の君の姉がまだ闇の女王と呼ばれる前の話、彼女が力をつけるきっかけの話だ。そして、今や彼女は自分の力で未来を切り開いていく。良いも悪いも無くこれからも歩みつづけるだろう。だがそれは別のお話。

最終章（後書き）

鬼の守る山はこれにて完結です。ここまで、お付き合いくださいまして有難うござります。

実は、昔書いたものを見直した作品で、かなり、書きたい様に書き散らした感があり、ネバーエンディングストーリーを読んだ事が無いとわかりずらい部分も多々あつたと思います。

話の運びなども、強引に進めてしまつたりしていますが、アイディアありきではじめたツケでしょうか？

ただ、ネバーエンディングストーリーが東洋風になつていたのは、意外だったのでは？と思つています。

どうしても、サイーテの昔の話を書きたかったのと中国ネタを入れたかったのです・・・

ともかく、少しでも楽しんでいただけたならば、幸いです。
宜しければ、感想など送つていただけると嬉しいです。

また、ただいま完全オリジナルで一本連載していますので、そちらの方も宜しければ試してみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3826d/>

鬼の守る山

2010年10月9日11時48分発行